

平成29年度
お茶の水女子大学論
ロールモデル講演集

リーダーシップ養成の実践のために

「お茶の水女子大学論」は、主に1年生を対象として、お茶の水女子大学の特色を知り、自らの将来をイメージしながら学生が在学期間を有意義に過ごすための導入的講座で、4つの要素（※1）から成り立っています。本講座では、学部生がお茶の水女子大学の歴史と現在を学ぶことを通して、本学の教育カリキュラムを自律的に選択し、授業を有効に活用し、社会のさまざまな場面でリーダーシップを発揮する人間として成長することを目指しております。

本冊子は、その一環として行われた、卒業生によ

るロールモデル講演（全6回）の内容をまとめたものです。第1回（6/7）は小林祥子氏、第2回（6/14）は岡垣さとみ氏、第3回（6/28）は武田幸子氏、第4回（7/12）は小島みさお氏、第5回（7/19）は山田庸子氏、第6回（7/26）は刑部南月子氏にご担当いただき、学生時代の過ごし方や職場での体験・経験などについてお話しいただきました。ご講演いただいた皆様にはこの場を借りて改めて御礼申し上げます。また、各回における受講生の感想も一部ではございますが、最終ページにまとめて掲載しております。

塚田 和美（グローバルリーダーシップ研究所長）

（※1）

1. 学長によるオリエンテーション
2. お茶大の歴史、お茶大生の特徴、学内の各種プログラムを知る
3. お茶大卒業生のロールモデルから学ぶ
4. お茶大講演会で学ぶ

目次

小林祥子 氏 (株式会社TBSテレビ 情報システム局)	文教育学部地理学科卒	2
岡垣さとみ 氏 (外務省 専門職員)	文教育学部哲学科卒	3
武田幸子 氏 (株式会社日立製作所 研究開発グループ 社会イノベーション協創統括本部企画室)	理学部数学科卒	4
小島みさお 氏 (花王株式会社 ヒューマンヘルスケア事業ユニット サニタリー事業グループ 開発リーダー)	家政学部家庭経営学科卒	6
山田庸子 氏 (東京都立小児総合医療センター心理福祉科 臨床心理士)	家政学部児童学科卒	7
刑部南月子 氏 (田園調布雙葉中学高等学校 理科教諭)	理学部生物学科卒	8

私の履歴書 (2017.6.7)

小林祥子氏 (株式会社TBSテレビ 情報システム局)



2017年度「お茶の水女子大学論」ロールモデル講演1(6月7日)は、1999年文教育学部地理学科卒で、現在株式会社TBSテレビに勤められている小林祥子さんをお招きし、入社当時から現在までの仕事内容や携わった番組でのエピソード、学生へのメッセージなどについてご講演いただきました。

小林さんは在学中、現役で活躍中の朝日新聞の女性記者の講演を聞いたことをきっかけに、情報を伝える仕事に興味を持つようになりました。その後、(株)東京放送(現:東京放送HD)に入社して、報道カメラマンやAD、ディレクター、報道記者、プロデューサーなどの現場での仕事、非現場のCSR推進など、様々な業務に携わり、現在は情報システム局システム管理部で、IT技術を利用した働き方改革や、音声認識技術を応用した業務効率化に取り組んでいます。

講演では、今まで携わった番組でのエピソードも含め、大変興味深いお話を色々していただきました。その中でも、特に印象的だったのは、ディレクター時代に担当した朝の情報番組におけるテロップの作り方です。テロップ作りにおける具体的な手順を説明していただき、手書きのメモからテロップを作成する担当や文字の校閲など、様々な人が関わっ

て作られていることを教えていただきました。

また、小林さんのキャリアの定義についても、お話しいただきました。小林さんは、自らの経験を踏まえた上で、仕事に限らず、私生活も含めて「キャリア」であり、その時々的人生を楽しむことで形成されるものであると考えています。ディレクター時代と現在の一日のタイムスケジュールを比べると、以前は土日もなく働いていましたが、現在は土日が休みで、趣味の時間も確保できているとのことでした。

そして、学生へのメッセージとして、まず、様々な経験をして欲しいことを強調されました。仕事だけでなく、恋愛なども含めた人生経験を積むことや、読書や人との対話から想像・共感することを大切にしたいとのことでした。人生には無駄なことは一つもなく、その価値の有無も後になってわかるからです。また、放送メディアの仕事に携わる者として、「情報は必ず『誰か』が『ある立場』で発信している。鵜呑みせず、自分の頭で判断できる情報の目利きになろう」という提言がありました。どのような状況にあっても、「自分だったら何が出来るか」を常に考えること、「楽しもう」という心がけが大事です。周りを知ることは、自分を知ることにも繋がります。さらに、小林さんが社会人の先輩として、後輩によくするアドバイスは、「反省」はしてもいいが、「後悔」はしない、ということです。ミスをしたら、原因を探って同じ間違いをしないように対処を考えれば良いという温かいお言葉をいただきました。

講演後に行なわれた質疑応答では、テレビ局に勤めている人の文系・私立大学出身者の割合や、異動や現在の部署に関するもの、周りからの批判に対する対応、また「ミステリーハンター」になるためにはどうすれば良いか、など学生から様々な質問がありました。

『誰一人として取り残さない』社会の実現に向けて 持続可能な開発目標を考える (2017.6.14)



2017年度「お茶の水女子大学論」ロールモデル講演2(6月14日)は、文教育学部哲学科卒で、現在外務省に勤められている岡垣さとみさんをお招きし、入省当時から現在までの仕事内容やSDGs、日本の国際協力などについてご講演いただきました。なお、今回の講演は、グローバル協力センターの第2回SDGsセミナーとの同時開催でした。

岡垣さんは、外務省に専門職員として入省後、外務省員に必要な語学研修として、カナダ・クイーンズ大学大学院にて社会学修士課程を修了されました。現在も外務省で、文化交流、国連、人権、気候変動、国際協力、ヨーロッパ、大洋州、防災、ジェンダー、G7サミット等の業務に携わり、多方面に活躍されています。これまでの海外勤務地は、タイ、アメリカ(NY)、カナダです。

講演では、まず、外務省に関する基礎的な知識を教えてください、さらに具体的な専門職員のキャリアの流れについてお話しいただきました。職場環境として外務省は、男女差によって仕事が区別されることがなく、育児休暇制度などのサポートも充実しているため、女性にとって働きやすい環境であるとのことでした。結婚や出産など将来のことを考えて、

岡垣さとみ氏(外務省 専門職員)

外務省入省の道を諦める人もいますが、岡垣さんは、自身の結婚・出産育児・単身赴任の経験から、まず自分のやりたいことを追求していけば、周りの人のサポートも得て乗り越えられることを強調されました。そして、外務省を目指す学生に対しては、そこが多くの可能性を提供してくれる、知的な刺激にあふれる職場であり、個人の自主性と積極性が尊重される場であると説明してくれました。また、その一方で、仕事では忍耐強さが求められ、さらに厳しい生活環境で仕事をするのが多く、精神的・体力的にタフでなければならないという現実的な側面も教えていただきました。

また、本講演の主題ともなっている、SDGs(=Sustainable Development Goals)、つまり持続可能な開発目標についてお話しいただきました。2001年から2015年までの期間で施行された、SDGsの前身であるMDGs(=ミレニアム開発目標)が、途上国の目標として8つのゴールとその下に21のターゲットを定め、国連の専門家らの主導に基づき施行されたものである一方、2016年9月に策定されたSDGsは、17ゴールと169のターゲットに数値を大幅に増やし、全ての国の目標として、193カ国の国連全加盟国で交渉した上で作成されました。SDGsは、MDGsの1から6のゴールをさらに深掘りした点、そして先進国にも関わりの深い新たな課題を制定した点が特徴であり、その最も重要なキーワードは、“Leaving no one behind”つまり「誰一人として取り残さない」ことです。

特に、目標4「質の高い教育をみんなに」というのは、様々な目標に関わる重大な問題であることを指摘されました。とりわけ女子の就学率は低いのですが、勉強をすることは女子自身のためだけでなく、家族やコミュニティー、そして国の利益へとつながります。2016年に行なわれたG7伊勢志摩サミットで

は、日本のコミットメントとして「女子教育の普及が遅れている地域（アフリカ、南アジア）を中心に、学校建設等により約5万人の女子の学習環境を改善する」ことを掲げ、現在支援しているところのことでした。

特に、目標4「質の高い教育をみんなに」というのは、様々な目標に関わる重大な問題であることを指摘されました。とりわけ女子の就学率は低いのですが、勉強をすることは女子自身のためだけでなく、家族やコミュニティ、そして国の利益へとつながります。2016年に行なわれたG7伊勢志摩サミットでは、日本のコミットメントとして「女子教育の普及が遅れている地域（アフリカ、南アジア）を中心に、

学校建設等により約5万人の女子の学習環境を改善する」ことを掲げ、現在支援しているところのことでした。

講演後の質疑応答では、岡垣さんが外務省に入ろうと思ったきっかけや、外務省における総合職と専門職の具体的な違い、学生時代に勉強していた哲学が仕事に生かされているか、また、語学（英語）をどのように勉強していたのか、などの質問がありました。また、学生へのメッセージとして、「自分の関心がある分野を一つ二つ極めることが大切」、「言葉はツールであり、自分がそれを使って伝える、説得することで初めて意味を成すものである」などのお言葉をいただきました。

「お茶の水女子大学論」ロールモデル講演 3 :

理学部数学科卒の先輩 (2017.6.28)

武田幸子氏 (株式会社日立製作所 研究開発グループ 社会イノベーション協創統括本部企画室)



2017年度「お茶の水女子大学論」ロールモデル講演3(6月28日)は、理学部数学科卒で、現在、株式会社日立製作所 研究開発グループ 社会イノベーション協創統括本部企画室にお務めの武田幸子さん

をお招きし、学生時代の就活の様子や、入社当時から現在に至るまでの仕事内容、仕事と家庭とのバランスなどについてご講演いただきました。

武田さんが就職活動を始められたのは学部3年の秋・冬頃からで、自分が何に喜びを感じるのか、自分の長所・短所、将来の夢など自己分析を始められたそうです。その中で、自分はじっくり考え、解決策を導き出した時に喜びを感じることに気づき、自分のアイデア・仕事を通じて社会に役立つことをしたいと思われるようになりました。そして、社会に必要不可欠で、かつ自分も利用者となる「通信」「ネットワーク関係」の研究を希望されるようになります。

日立製作所に入社後、武田さんはネットワークサービスが発展する時代に研究開発に従事すること

となります。1992年に研究開発の一担当者として働き始め、ネットワークサービスの研究開発やお客様への提案活動などを行ってこられました。研究開発の一環として、世界のどこでも電話がつながるよう、国際標準化会合にも参加されました。入社3年目に初めて参加した国際標準化会合（スイス・ジュネーブ）でのミッションは、社内の関係部署に結果を報告することでした。会合では、発言することが参加者として認められる条件であると知り、二回目以降は提案を持っていくなどの工夫をされたといいます。その結果として、提案が標準仕様に採用されることとなり、標準仕様は提案・交渉を通じて作り上げるものであることを実感されたそうです。また、武田さんは、2008年からの2年間、研究所を離れ、システムエンジニア（SE）として働かれましたが、ここでの経験は、研究者としてのあり方を考えるきっかけの一つとなったといいます。

これまでの業務経験から学んだことを、武田さんは次のようにまとめていました。まず、SEの仕事を通じて、様々な関係者（お客様・社内）と協力し、大きな仕事を達成する喜びや、「事業」として成立させることの大変さと大切さ、そして「一緒に仕事ができよかったです」と言われたことの喜びなどを知ることができたこと。また、研究開発（取りまとめ）では、メンバーとのコミュニケーションの大切さを再認識したこと。皆で決めた目標に向け、チームをリードすることの楽しさと難しさ、さらにその

成果をタイミングよくアピールすることの大切さも痛感したとのこと。そして、現在の企画業務でも、多くの尊敬できる仲間に支えられて、世界各地のメンバーと仕事を推進する中で、お互いの時差の壁を感じつつも、多様な文化・考え方を学びながら、日々仕事をしているといいます。

これまで、武田さんはアイデアが製品に搭載あるいは規格にされた時や、壁を乗り越え、大きな目標を達成した時などに喜びを感じてきたけれど、仕事を続けることができた理由は、多くの尊敬できるメンバーに支えられつつ、その人たちと共にできるという環境があったからだと言われます。また、仕事だけではなく、プライベートにおいても、前向きな目標を持ち、両立の方法を自分で考え続けることを心がけているといいます。武田さんの言葉を借りれば、「連立方程式を解く感覚」でいることが大切とのこと。

最後に、ご自身の25年間のキャリア経験から、「目標を見つけチャレンジする」「壁にぶつかっても、諦めず、前向きに」「沢山やりたいことを両立するために、自分で考え続ける」などの学生へのメッセージをいただくことができました。

質疑応答では、学生から「英語力の必要性」や「開発研究に携わる中、新しいアイデアを得るために普段していること」、「仕事が忙しい夫婦間での時間の取り方について」などの質問が寄せられました。



家政学部家庭経営学科卒の先輩 (2017.7.12)

小島みさお氏 (花王株式会社 ヒューマンヘルスケア事業ユニット
サニタリー事業グループ 開発リーダー)



2017年度「お茶の水女子大学論」ロールモデル講演4(7月12日)は、家政学部家庭経営学科卒で、現在花王株式会社にお務めの小島みさおさんをお招きし、大学時代のお話から就活、そして入社後のキャリア、またご自身の仕事・家庭・ボランティア活動についてご講演いただきました。

小島さんは、大学時代に受講した「消費者教育」という講義で、日本ヒープ(HEIB: Home Economists In Business)協議会の活動を知りました。チャレンジの幅が広がると思い、その活動の中心である花王に入社され、生活者と企業のパイプ役としてのメーカー勤務の道を進むことになりました。

現在、花王に勤務して27年目となる小島さんは、これまで、相談対応、生活者研究、啓発活動、そして商品開発に携わってこられました。

生活者研究では、高齢者の家庭・施設などを現場訪問し、そこでの対話・観察を通じて、新たな提案をするということを行われました。

また、啓発活動では、介護サポートセンターという部署で、シニア・高齢者への相談対応や学術活動を行われました。今までの相談対応での商品説明と異なり、相談者の悩みを聞きながら、問題解決へと導くというのが主な業務内容だったそうです。さら

に、高齢者への啓発として、紙おむつのあて方動画の配信やシニア向け雑誌への掲載、イベントでの啓発・情報提供、看護・介護専門職員への説明会なども行われました。

そして商品開発では、化学会社だからこそ全てを自社で対応して開発できるという花王の強みを活かして、数々の商品を担当されました。事業部でコーディネーター(=開発担当者)として働いている小島さんは、様々な部署と協働する、提案する必要がある職場なので、変化を楽しめる人には良い環境であるとお話していました。

以上のようなキャリアと共に、ご自身のプライベートでも充実した日々を過ごされているそうです。結婚、出産後も、保育サービスを有効活用しながら、通信教育で介護福祉士の資格を取得したり、土日に少年野球のアナウンスを担当するなど、ご自身の生活も楽しんで過ごしていたといいます。このように家庭と仕事との両立を図ることで、ベストヒープ賞を受賞したり、就職ジャーナルに掲載されたりと、様々な機会にも恵まれたそうです。そして、現在は、社会人大学院生として週2、3回は大学院に通われています。

また、職場と大学に通う傍ら、排泄に関する電話相談を行うボランティア活動も積極的に行われているそうです。小島さんにとって、ボランティアはご自身のライフワークとなっているといいます。例えば、NPO法人日本コンチネンス協会では理事として、コンチネンスケア、つまり排泄障害の予防・治療・ケアに関しての無料の電話相談に、10数年関わっていらっしゃいます。

小島さんは、仕事を通して、臨床・教育・研究が連関した、専門職としての基盤が得られたと言います。また、①現場観察と対話の大切さ、②モノと情報から、サービスを如何に提案していくかの面白さ、

③鳥の目、つまり社長や部長など上の人の目を見る必要性、④昨日の自分を超え、リニューアルを楽しむことが重要であると知ったそうです。

最後に学生に対して、学生時代にはとにかくチャレンジして、失敗をバネにすること、多世代・多国籍などの人と出会い、人脈力を磨くこと、高い目標を持つことを大切にしてほしいというアドバイスをいただきました。小島さんご自身も、今後の目標と

してコンチネンスケア学の学びの場をつくることを掲げていらっしゃるように、人生はずっと楽しめるものだということを教えていただきました。

質疑応答では、「配属や異動はどのように行われたのか」、「日本ヒーブ協議会の具体的な活動はどのようなものなのか」、「どのようなことに心がけて常にアクティブに活動されているのか」などの質問が寄せられました。

「お茶の水女子大学論」 ロールモデル講演 5 :

家政学部児童学科卒の先輩 (2017.7.19)

山田庸子氏 (東京都立小児総合医療センター心理福祉科 臨床心理士)



2017年度「お茶の水女子大学論」ロールモデル講演5 (7月19日) は、家政学部児童学科卒で、現在東京都立小児総合医療センター心理福祉科にお務めの山田庸子さんをお招きし、臨床心理士としての仕事や、働く中で感じていることなどについてご講演いただきました。

最初に勤務された都立の療育園では、新人・ベテラン問わず、一定の水準で仕事をするのが求められたそうです。(新人の自分が) 全くできないことに直面したことで、素直にゼロから学ぼう

と感じるようになったと、当時の様子を振り返られました。

3つ目の職場である都立病院では、がん診療や緩和ケアが行われていました。この病院で取り入れられたのが「リエゾン (=繋ぐ、連携)」で、患者さんにカウンセリングなどの心理的支援も行うことで、包括的な医療サービスが出来るようになっていました。山田さんは、医療の質を高め、その過程で得た学びを患者さんに還元したいという気持ちで仕事をしてきたそうです。

いくつかの病院に勤務した後、また前のがん診療の職場に戻りました。神経科リエゾンチームのリーダーとして働くことになり、山田さんは、心理学を活用して、それぞれの人が働きやすいよう調整するコーディネータのようなリーダーを目指したと言います。この職場では、組織や医療経済を含めた俯瞰的視点を持ち、他職種との協働の上でリーダーシップを発揮することを実践してられました。

そして、2016年4月から現在まで、都立小児総

合医療センター心理福祉科の児童精神科病棟専従として働かれています。最近では、より複雑化したケースも増えており、より丁寧な支援が求められているといます。今後は、対象となる子どもたちとの年齢差が開く中、どのように対応を変えていくか、後輩の指導などに対して、いかに取り組んでいくかが課題だそうです。また、東京都の職員は、異動が定期的にあるため、職員の育成という面で、より短い時間で体得できるようマニュアル化が必要ではないかと指摘されました。

以上のご自身の経験を通して、働くなかで感じていることについてもお話いただきました。まず、ロールモデルの存在を参考にして働くことを挙げられました。また、「主体的な受け身」というスタンスに立ち、対象となる人の主体性を尊重する態度で接することができるよう技術も研鑽していき、与えられたものに対してどう取り組むかを考えられるようにしたいということでした。

仕事内容に加えて、ご自身の私生活についてもお話いただきました。家族・友人を大切に、趣味を楽しみつつ、好きな仕事をしていくことを大切にしているとのことでした。

最後に、学生に対して、人は人の間でしか磨かれないので、人と接することを恐れず、憧れる気持ちを大切に、良い点を取り入れていくようにしてほしいというアドバイスをいただきました。

質疑応答では、「管理栄養士を目指しているが、管理栄養士として摂食障害の問題に携わることは可能か」、「遺伝カウンセラーに興味があるが、カウンセラーに求められる資質などあるか」、「障害者福祉施設でボランティアをしようと思っているが、どのようなサポートが必要、あるいは出来るのか」などの質問が寄せられました。

「お茶の水女子大学論」ロールモデル講演 6 :

理学部生物学科卒の先輩 (2017.7.26)

刑部南月子氏 (田園調布雙葉中学高等学校 理科教諭)



2017年度「お茶の水女子大学論」ロールモデル講演6 (7月26日) は、理学部生物学科卒で、現在田園調布雙葉中学高等学校に理科教諭としてお務めの刑部南月子さんをお招きし、ご自身の経験や進路選択、大学院あるいは教職を目指す学生へ向けたメッセージなどについてご講演いただきました。

刑部さんは、同学園に小学校から高校まで通われ、お茶の水女子大学に入学されますが、大学卒業後の進路については教育に進むか、あるいは研究に進むかで迷いがあったといます。教育については、学部生時代から、高校生の授業でのTA経験や大学のア

ウトリーチ活動などを通じて、自分が面白いと感じていることを積極的に共有することに喜びを感じていたそうです。刑部さんのロールモデルである先生は、学校の先生をしながら、研究でも成果を出していたそうで、学校教育にも関心を抱くようになったといいます。

進路を考える上で、まず「本当に自分は研究が好きで、何よりも研究を優先しているだろうか」という点を振り返り、その点は問題なかったそうです。しかし、次に「職業として『研究』できるか」という問題がありました。何かを追究したいという研究肌と、研究者としての能力・精神があり、加えて興味があること以外も研究することができる研究者肌というのは異なります。「人類にとって未知の事実を、自分が掴むことに喜びを感じられるか」という問いを自問自答した際、刑部さんが出した答えはそうではないかもしれない、というものでした。そして、「自分是对『何』に興味があるのか」を考えた時に、可能性を秘めた中高生を相手にしたイベント企画への参加を思い返し、「人」に興味があることに気が付いたそうです。

自分が好きな職業を選ぶ方法として、興味があるものをどんどん書き出して、グルーピングして、キーワードを見つける方法をご紹介します。さらに、興味があるものをどんどん掘り下げて「根っこ」を掴む、つまり共通項が何なのかを把握してみることも大切だと言います。刑部さんは、この方法で、知識を集め、新しい意味づけをすること、面白さの共有が共通しており、キュレーター的な役割が合うのではと思いついたそうです。

本学大学院博士前期課程の在籍時、附属中学校で非常勤理科講師として働く機会を得て、その面白さを知り、学校現場に惹かれていることに気付かれます。教育に携わるためにも、自分の専門分野を持つこと、研究機関を離れても生徒の探究活動を応援し、自身も研究を続けていけるような知識や技術を身に付けることを目的に、博士課程へと進学されたそうです。現在、教師として学生と携わる中で、学生の「何でだろう」という疑問を大事にして、何をどのように教えるかという無限の可能性を試していくことができると考えているそうです。

学生へのメッセージとして、一体自分は何が好きなのか、どんなことに興味を持っているのか、どのような方向に進みたいのかについて、とことん悩み、やりたいことがある場合は迷わずとりあえず飛び込んで、経験を積んでほしいというお言葉をいただきました。そして、10年後、20年後にどのような姿になりたいかをイメージし、とことん悩み考えぬいたと自信を持って、進路を決めてほしいということもおっしゃっていました。そのためにも、小さなことでも、目立たないことでもいいから、「私はこれを頑張った」「これを大切にしていきたい」と言えるものを作ってほしいと言います。言葉にして表現できる、言語化できることの重要性を主張されました。

質疑応答では、「これからの人生の目標は何か」、「将来、中高の校長になりたいが、どのような経験を積めばよいか」、「お話がとても上手だが、学生時代、人前で話す機会はあったのか」、「大学院進学を考えているが、気持ちの面でアドバイスがあるか」などの質問が寄せられました。

受講生の声（一部抜粋）

① 2017. 6. 7の感想

- テレビ業界のリアルな話を聞くことができとてもありがたかったです。
- 情報がたくさん飛び交っているなかでも、正しく物事が判断できる知識や考えを大学で学んでいきたいです。

② 20. 17. 6. 14の感想

- 他の授業で貧困や国際支援、教育について学んでいるため、今回の講義は大変参考になりました。外務省について詳しく知ることができたのも良かったです。
- 「自分はこれだけは強い」という武器になるようなものをこれからの大学生活で突き詰めて勉強していきたいと思いました。

③ 2017. 6. 28の感想

- 企業の研究職がどのようなものかを知ることができ、私も理系なので参考になる話がたくさんありました。
- 大学での学びやサークル活動は、直接は仕事につながらないとしても、考え方を身につけたり、様々な体験をしておいたりすることは将来どのような道に進んでも役に立つのだなと思いました。

④ 2017. 7. 12の感想

- 最後に「失敗を恐れずやってみよう！」とってくださいましたが、背中を押していただけたような気がしました。
- 就職してからも自分の知識を増やすために様々な資格を取ったり大学院に進学されたりしていて、学び続ける姿がかっこいいと思いました。就職がゴールではなく、むしろ自分が知らない世界へのスタートラインなのだと思います。

⑤ 2017. 7. 19の感想

- 「人と接することを恐れない」、「いろいろな尊敬する人のパッチワークで自分はできている」という言葉が心に残りました。新しい人と知り合い、交流することを楽しみたいと思います。
- 「皆が力を発揮しやすい調整役としてのリーダー」を目指したという話がとても参考になりました。

⑥ 2017. 7. 26の感想

- 進路を考える時、自己分析を深めると同時に、様々な活動を実際に行ってみて答えを見つけていくという方法が実践的で、自分もそのように進路を決めたいと思った。
- 大学1年生でキャリアを考えるこの授業をとって良かったなと思いました。これからの大学生活をどう過ごすかを考える良い機会になりました。



平成29年度 お茶の水女子大学論
ロールモデル講演集

発行日 平成29年12月31日

発行 国立大学法人お茶の水女子大学
グローバルリーダーシップ研究所
〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
E-MAIL : info-leader@cc.ocha.ac.jp
TEL : 03-5978-5520
<http://www.cf.ocha.ac.jp/igl/>

編集責任 グローバルリーダーシップ研究所 特任講師 大木直子

編集協力 グローバルリーダーシップ研究所 アカデミック・アシスタント 大持ほのか

文部科学省特別経費(国立大学機能強化分)

「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と
新たな女性リーダーシップ論の発信」